

氏名(国籍)	許 宰 碩 (韓 国)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博 甲 第 4880 号
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	日韓両言語におけるアスペクト形式の対照研究
主 査	筑波大学教授 博士(言語学) 矢 澤 真 人
副 査	筑波大学教授 博士(言語学) 大 倉 浩
副 査	筑波大学教授 博士(言語学) 坪 井 美 樹
副 査	筑波大学准教授 文学博士 金 仁 和
副 査	筑波大学准教授 博士(言語学) 那 須 昭 夫
副 査	筑波大学准教授 橋 本 修

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、現代日本語と現代韓国語のアスペクト形式に関する対照研究である。

現代日本語の基本的なアスペクト体系は、一般的に、完成相(「する」/「した」)と継続相(「している」/「していた」)の対立として捉えられている。近年、これに「てある」を加えて、三者の関係の中でアスペクト体系を捉えようとする試みも見られる。本論文も基本的にこの立場に立ち、日本語と韓国語との対照を試みたものである。

本論文では「た」に、状態の切り替え時点(変化時点)を表すという統一的な意味(完成相過去)を想定し、ここから、「パーフェクト相現在」や「開始限界達成性」、モーダルな用法も統一的に捉えられることを指摘する。一方、韓国語の「eoss」は、「eo is (da)」の「完了持続性(完了性+状態性)」から切り離されていないために、過去だけでなく、非過去(現在・未来)の状態も表せるという特徴を持ち、この点で、韓国語の「eoss」は日本語の連体修飾節の「た」とよく似ている。このような両国語のテンスを取り巻く状況を踏まえた上で、日本語の「た」「ている」「てある」、韓国語の「eoss」「go issda」など、テンス・アスペクトに関わる形式の表す意味について、詳細な検討を加える。加えて、「てある」と同様に処置を表す「ておく」や韓国語の「eo nohda」「eo duda」なども含めて、両言語のアスペクト体系を総合的にとらえることを試みる。これにより、両言語のアスペクト形式において、文法化という(内部要因)だけでなく、視点の問題や動詞の格パターンなど、(外部要因)が複合的に影響していることを明らかにする。

本論文の構成は以下の通り。

「第1章 序論」では、本論文の目的と意義、および本論文の構成について述べる。

「第2章 先行研究」では、日韓両言語における先行研究の流れを検討するとともに、先行研究の成果と問題点を具体的に指摘する。

「第3章 日本語と韓国語の過去形」では、日本語の「た」の中核的な意味が過去であるという観点から、韓国語の「eoss」との違いを明らかにする。「た」は、状態の切り替え時点(変化時点)を表すという点で、「完

成相過去」「パーフェクト相現在」「開始限界達成性」という三つの意味が統一的に捉えられることを指摘する。一方、韓国語の「eoss」は、過去だけでなく、非過去（現在・未来）の状態も表せるという点について検討を加え、「eoss」と「た」の違いを捉えていく。

「第4章 日本語と韓国語の状態化形式」では、「ている」や「である」が、「た」との有機的な関係の中で捉えられ、状態性の観点から対立していることを指摘する。一方、韓国語の「eoss」は一種の状態化形式として働き、日本語の「ている」の「動作進行」「結果状態」「動作パーフェクト」に対応することを示すとともに、文と文の繋がり（タクシス）の点からも検討を行う。この過程で、「go issda」の動作パーフェクトの意味は、先行研究で言うように進行相から派生しているのではなく、結果相の「go issda」から派生している可能性が高いことを示す。

「第5章 過去形のムード的意味用法」では、ムード的な意味の「た」について検討を加える。特に、韓国語の「eoss」との対照の観点から、「発見」「決定」「未来の状況に対する確信」などについて考察を加える。

「第6章 現代日本語の「である」の意味特徴」では、近現代小説の用例調査を行い、近代日本語の「である」と現代日本語の「である」の類似点と相違点を実証的に示す。特に、「である」が「ている」に交替されていく通時的な変化の中で、近代日本語の「である」がまだ近世の「である」の影響を受けていること、受動型の「である」は存在文の「ある・いる」の変化と連動していること、作者の出生年代により、受動型に対する能動型の割合が違っており、1920年代以降生まれの作家から能動型の増加が目立つことなどを示す。

「第7章 準備を表す表現」では、日本語の「である」「ておく」と韓国語の「eo nohda」「eo duda」について共通点と相違点を示す。日本語の「ておく」に視点制約があること、日本語のほうが韓国語より視点に敏感であることを示し、このために「eo nohda/duda」が「ておく」ではなく、動詞の基本形や「てくれる」「ている」「てしまう」などに訳されることを指摘する。

「第8章 移動動詞の格表示とアスペクト形式との関係」では、「ている」と「go/eo issda」について、移動動詞の格パターンとの関わりから検討を進め、日本語の起点「から/を」格と着点「に」格が移動の瞬間を捉えるだけで、移動のプロセスとして捉えられにくいこと、「ている」の意味が動作進行を表しにくいこと、韓国語の起点「eseo/leul」・着点「e/leul」格は一種の移動経路として捉えられ、動作進行（「go issda」）をも表すことができること、日本語では起点・経路・通過点が[-結果性]、着点が[+結果性]となるが、韓国語では起点と着点が[+結果性]になり得ることなどを指摘する。

「第9章 移動性の『VNする』と『VNhada』のアスペクト的意味」では、日本語の「VNする」と韓国語の「VNhada」のアスペクト的意味について考察し、移動性の「VNする」と「VNhada」の間にはアスペクト的な素性が異なっており、この違いが「ている」の意味解釈の違いを生じさせること、日本語では動作動詞と変化動詞が同じ「VNする」で言い表されるのに対し、韓国語では動作動詞と変化動詞との間に形式のあり方の違いが見られることなどを指摘する。

「第10章 結論」では、結論として各章で得られた分析内容をまとめ、今後の課題について述べる。

審査の結果の要旨

本論文で最も評価すべき点は、日韓両言語のテンス・アスペクト体系を総合的にとらえ、詳細な比較を行った点である。本論文の視野は、現代語にとどまらず、日本語・韓国語のテンス・アスペクトの歴史の変遷にも及んでいる。従来の研究では、ともすると動詞分類の枠で処理してきた事項についても、視点や移動表現、さらには文と文の繋がり（タクシス）など、広範囲な視点から検討を加え、これまで注目されてこなかった現象に光を当て、それに適当な位置づけを与えることに成功している。

本論文では、「である」という形式をアスペクト体系の重要な成員として位置づける。従来のアスペクト

研究は「る」と「ている」の対立を軸に記述され、「である」は補助的な位置に置かれるのが普通であった。著者は、歴史的に見ても「である」がアスペクト形式として「ている」に先行すること、現代の用法でも「ている」と「である」は補完的な位置にあることなどから「である」も含めたアスペクト体系を想定する。「である」をアスペクト体系の一面に置くことにより、日本語「ておく」との関わりや方向表現とアスペクトの意味との対応をアスペクト体系全体から俯瞰することを可能にしている。また、韓国語との対照に関しても、「go issda」や「eo nohda」「eo duda」などとの全体的な対照ばかりでなく、日韓両言語で「留学する」と「留学 hada」のような動作性漢語動詞はアスペクト的な素性が異なっているといった発見にも結びついている。

ただ、本論文には、用例の解釈を、著者が想定するものに絞り込もうとして、それ以外の解釈を排除してしまった部分が見られる。意図する解釈は確かに成立するので、論立て自体には問題とならないのだが、なぜ、それ以外の解釈が成立するのか、どのような要因で二つ以上の解釈の優先順位が定まるのか、といった観点からの考察が欠けている点が惜しまれる。しかし、これらは、本論文で追究した課題から派生する形で現れたものであり、これらが未解決であることによって、本論文の価値が貶められるものではない。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。